

総合討議の記録

【内田】 総合討議は私も含めての報告者4人に加えて、近代公園史や近代庭園がご専門の名城大学の丸山先生、それから、『明治維新・廃城一覧』などで、全国の近世城跡の明治以後の変遷をまとめられました、元検事正で弁護士の森山英一先生にもご登壇頂いているところでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先程の個別の報告の時は質問がございませんでしたけれども、今、会場の方から改めて何かございますでしょうか。なければ、高木先生の報告に関して、何かございますか。丸山先生、お願いします。

【丸山】 高木先生とは長いつき合いののですけれども、今日久しぶりにお会いしまして、いつもながら中身の詰まったお話でした。時間が足りず、大分駆け足でお話しされたので、まだ何か言い足りないところがあったのではないかと思いますので、桜の話で、もう少し伺えればと思います。

【高木】 弘前城だけでなく、皆さんの地域でも桜の名所があると思うのですけれども、全国の旧城下町の城跡に、20世紀に桜が植樹されていきます。ここで主体になってくるのはソメイヨシノです。弘前城では最も早い確実なところで、1900年（明治33年）、日清戦争後の皇太子の結婚記念に植えられた記録があります。これについては東京からソメイヨシノを持ってきたことが、はっきりしています。大体その頃が始まりで全国に広がっていくと思います。東京



でも明治10年代、20年代ぐらいからソメイヨシノが上野公園とかで植えられます。ソメイヨシノは、新しい近代の桜で、報告でも申しましたように、葉がでる前に花だけが咲くものです。クローンですから、弘前城から鹿児島まで皆、同じ遺伝子組成です。

ソメイヨシノを標本木とした桜前線がそもそも成立するには、ソメイヨシノがある程度の量、植えられないと成立しないわけです。大体、大正期ぐらいになると新聞には、桜前線について彦根測候所の観測が記事となり、函館五稜郭まで桜前線は行き着くわけです。

大正期には、2つ桜前線が報道されます。要するに、ソメイヨシノが植民地でも植えられるわけです。1910年代以降の同じ時期に、釜山から始まって満州国境まで上がっていく桜前線と、内地を九州から函館まで駆け上る前線があります。朝鮮半島でも倭城や公園に桜が植えられるので、国内での桜のナショナルな意味が、朝鮮半島においても城跡（倭城）に影響するわけです。

一方、京都で最初にソメイヨシノが植えられるのが日露戦争後で、岡崎の動物園に植えられました。京都では、社寺などの名所とも関わって、伝統種の桜（山桜や里桜）が根強い人気で、ソメイヨシノへの拒否反応も強かった。そうした意味では、地方城下町の方が、東京からやってくる文明としてのソメイヨシノを、積極的に植えるのではないかと、思います。

【丸山】 京都の庭師の佐野藤右衛門さんがソメイヨシノは大嫌いだとかとおっしゃっていらして、京都というのはやはり都として、東京から来るソメイヨシノに対する対抗意識があったのではないかと、佐野さんの話のところで思いました。

【内田】 そうしましたら、羽賀先生の発表について、何か質問はございますでしょうか。

【会場A氏】 よろしいですか。記念碑に関して先生、

お書きになっていますけども、その辺に関してお聞きしたいのですが、愛知県などでは、大正の御大礼の時に結構、城跡に石碑がかなり建ちまして、おそらくほとんどがその時に建っているといっても過言ないと思うのです。1つは、なぜその時期にそういうふうに建ったのかと、それは城跡以外でも同じような状況があったのか、もしおわかりであれば教えて頂けないかと思います。

【羽賀】 今おっしゃったように、大正大礼以降、愛知県の各地、例えば長篠古戦場など非常に顕著だと思えますけども、広域的な古戦場空間の中にたくさんの石碑あるいは標柱、石柱が建っておりまして、それはもちろん愛知県の指導によって、いわば史跡を発見しよう、発掘しよう、ということだったと思います。

それからその他に、やはりちょうどその時期は古戦、合戦があって、大体300年ぐらい、今日の話でも出てきますけども、その時期、日露戦争は大正期になりますので、何らかのその300年を記念した形の記念碑類がたくさん建ってくるだろうと思います。その中で、城跡にも新たな光が当てられてくるのではないかというふうに思っています、ですから、大正初年の段階、1910年代が非常に大事な時期だろうというふうに思っています。

それから、もう1つ付け加えるならば、今日の話でもちょっと出てきましたけれども、山口県などの場合、100年前の200年にあたる年にある種の動きがあるということで、ちょうど文化文政から天保期にかけての時期は、戦国から徳川の統一へ行く段階では200年と言っています。それから、もう1つは、これは南朝の顕彰など動きが顕著ですけども、1820年代から40年代ぐらいは南朝の500年もしくは510年という、非常に大きな区切りに当たるのです。それから、もう1つは、これはそれほど一般化しないのですけども、神武創業2500年を祝って何かしようという、そういう動きが、特に水戸学、水戸徳川家の中に起こってくるということがあります。ですから、区切りの年というのは、ちょうど19世紀の初頭、そ

れから20世紀の初頭、現在もおそらく400年祭が色々なところで行われているかと思うのですけども、そういう区切りのところでなぜそういうことが起こってくるかは、それぞれの時代によって違うと思いますけれども、単純化はできなくて、非常に複合的な色々な要素の中でそういう年祭というのが行われて、その中の1つの動きとして記念碑等の動きもあるのだろうというふうに思っております。

【会場A氏】 ありがとうございます。

【内田】 他には何か質問、ございませんでしょうか。

【会場B氏】 今、羽賀先生がおっしゃったことでお聞きしたかったのですけれども、1900年前後の300年の時期について、記念祭を市民祭典だとおっしゃいました。また、200年の時の非常に面白い高知の事例の市民祭典というものを言われました。見通しで結構なのですけれども、200年のころの祭典と幕末の市民祭典と日清、日露前後、その辺のところの市民祭典の差を教えてください。

【羽賀】 200年の時、山内家の資料、事例を挙げましたけれども、おそらく、他の城下町にしろ宿場町にしろ、大きな神社というのがあるのです、産土社といいますか。そういうものの動向の中に、やはり神仏分離に対する対抗というのですか、神社の自立化みたいな動きがどうも出てくるような気がして、これは私の今の予測にすぎないのですけれども、仏教から分離して、地域社会の中で、地域の共同体のいわば中核として新しく神社を再生しようという動きが、どうも文化文政のころにあるのではないかと思います。そういう流れの中で、山内家の場合も、これは領主、藩祖を祀るだけじゃなくて、その地域社会における、ある種の共同体の危機を救っていくような、そういう中核的な施設をつくらなければならないという、そういう動きがあるのではないかと思います。そういう意味では、市民祭典というか、単なる領主が支配を強化するための結集の軸という側面ではなくて、その城下、領主に加えて領民全体、藩というものの全体の集団性というか共同性をいわば再生していくためのある種の装置が必要であって、そ

れが藩祖の名をかけた神社ということになってくるのではないかというふうに思っておりまして、そういう面から市民祭典みたいなことが発生して、それが20世紀の初頭になると非常に一般化していくのではないかというふうに考えておりまして、そのあたり、まだこれから検討すべき課題があります。

それから、もう1つ、藩祖ではなくて当主、その時期の、19世紀初頭の藩主そのものを神格化して、そして、その周りで、共同体の維持とか、あるいは五穀豊穡とか、そういうことを祈念するような祭礼というのが、ちょうど同じ時期に起こってくるのです。これは、私もちょっと言及しましたがけれども、鳥取大学の岸本さんという方が主に研究されていましたが、殿様祭というのがあって、私は広島をちょっと勉強したのです。広島で、ちょうど文化文政以降、頼家、頼山陽の叔父さんの頼杏坪というのがいますけれども、その人を中心に、やはり村落の産土社で、殿様を春と秋に祭って、春は収穫を祈る、それから秋は収穫を感謝するという、そういう殿様祭を実際に行っているんです。ですから、領主あるいは藩祖というものが持っている意味が、その当主の家の問題ではなくて、地域の中で、ある種利用されていく、使われていくという側面が19世紀に入って出てくるのではないかという、そういうふうに考えていまして、今日の祭礼の話もそういう中で位置づけたいなというふうに思っております。

【内田】 ありがとうございます。他に質疑、どうぞ。

【伊津見】 愛媛県今治市の今治城で学芸員をしている伊津見と申します。近代以降、城郭の中に設置される神社についてですけども、これは、明治政府による神社の合祀政策というのも動きは絡んでくるのでしょうか。今治城は本丸に吹揚神社という神社があるのですが、これは明治5年に造られたもので、近隣の神社4社を合祀したところからスタートしているのです。その後、明治時代を通じて旧城下町や近隣の神社を次々と合祀して、どんどん大きくなっていったという中で今に至っているという

ところがあるのですが、そうした合祀の政策との関連があるのかどうか、もしわかれれば教えて頂きたいと思います。

【羽賀】 ありがとうございます。私は全く今のご指摘は考慮の外でありまして、合祀政策、大正、日露戦争ですね、社会改良運動の中で出てくるような合祀政策と城郭内の神社についての関連性については全く視野に入らなかったものですから、これから勉強させて頂きたいと思います。

【内田】 羽賀先生につきましては、現在のフィールド、東海地方での詳しいお話を伺ったわけなのですが、全国的に城跡の神社がどうなっているかについては森山先生が調べられておりますので、城跡にある神社の種類ですとか、在城時に既にあったものとその後できたものと、あるいは、出ていったのにまた戻ってきたものとか、そのあたり、分類ができるかと思っておりますので、その辺、説明頂ければと思います。

【森山】 それではご説明いたしますけれども、ただいまご質問がありました今治城内の吹揚神社、これは特殊な例だと思います。明治政府が神社の合祀を進めて、これに南方熊楠が非常に抵抗したというのは有名な話なのですが、私が知る限りでは、藩主を祭る城内の神社に他の周辺の神社を合祀したという例は、聞いておりません。

次に、城内にある神社ですけども、大体、大きく分けて3種類、細かく言えば4種類ぐらいに分けられると思います。1つ目は、藩が存在した、要するに城が城として存在した当時から城内にあった神社であります。これは氏神様のようなものです。例えば、西尾城内にある御剣八幡宮であります。

二つ目で一番多いのは、旧藩主、藩祖とか著名な藩主を祭った神社です。これは羽賀先生のご報告にもありました通り、かつての旧城内や江戸の藩邸内に祀っていた神社を改めて城内に祭ったものもありますけれども、大部分は廃藩置県後に建立されたものであります。その趣旨は、廃藩置県によって旧藩主は全部上京を命ぜられてかつての領地を離れてし

まって、旧藩士と切り離されてしまいました。その時に、旧藩家臣団の団結、誇りを維持するために旧藩主の旧徳、遺徳を偲ぶ目的で建立されたものが多いと思います。

三つ目は、いわゆる招魂社、それに続く護国神社の系統に属する神社です。招魂社というのは、戊辰戦争の後に官軍の戦死者を祀った神社です。まず統一的な神社としては、政府が造った九段の靖国神社がありました。これも最初は招魂社といていたのですけれども、これにならって戊辰戦争の時に、いわゆる官軍、新政府側に立って出兵した諸藩も自分の藩の戦死者を祭る招魂社を城内に建立したのが、起源であります。長野県の岩村田城は幕末に造りまして、未完成のうちに廃藩になった城なのですが、この岩村田城址に行きますと、やはり招魂社があります。岩村田城の建物の遺構は現地に残ってないのですけれども、招魂社のいろいろな施設例えば手洗石などには、「軍務局」とか、旧藩当時の名が刻まれたものがありまして、それ自体が城の遺構と言えるものであります。

四つ目は、維新後に造営または移築されたもので、淀城内の與杼神社や八代城内の八代宮のような著名な神社も含まれております。特殊な神社としては、茨城県の笠間城内にあります佐志能神社があります。これは廃藩後に建立された神社ですけれども、かつての笠間城の天守の一重目を社殿に使っております。ですから、社殿が天守の遺構なのです。東日本大震災で笠間城もかなり傷んでいまして、現在立ち入り禁止になっております。



それに追加して五つ目を申し上げますと、築城の際に、それまであった神社とか寺院を移転させた例が非常に多いのです。この神社が廃藩後にまた城に戻ってきて祭られているものがあります。犬山城内にあります針綱神社はもともと犬山城の築城以前に城があったところであって、築城の際に移転させられたのですが、廃藩後、明治時代になってまた城内に戻ってきたものです。

大体、以上でございます。

【内田】 ありがとうございます。城内の神社につきましては5種類程度に分類できるというお話でございました。この近くでは例えば大和郡山城ですけれども、明治13年に旧藩主を祭る柳澤神社というのができております。そして、その時には神社ができたことを城下の人たちが喜んで行列をなしたというような記録もあるわけでございます。一方、やはり今は旧藩主を直接的に知っている人もいなくなって、その神社の祭神に対する思いというのは以前に比べると大分薄くなっているのかなとも思うわけでございます。それがために、旧藩主を祭る神社などが維持困難になっていくというようなことも実際にあると聞いております。森山先生、ここは少し解説をお願いします。

【森山】 それでは付言してご説明いたします。

まず、旧藩主を祭る神社けれども、例えば米沢城内にある上杉神社、これは上杉謙信という非常に著名な英雄を祭っていますので、尊敬を集めて繁栄しているのですけれども、各地の城郭を回ってみますと、見るからに社殿が荒廃して維持が困難になっているのが一見してわかるものが少なからずあります。例えば、福島県の棚倉城、この城内には、かつて旧藩主の阿部氏の藩祖を祭る鎮護神社があったのですけれども、行ってみたところ社殿がないので問い合わせをしたら、維持ができなくなったので、他の神社に合祀して、社殿は取り壊したということでありました。

また、今日は上田市の方がお見えになっているそうなので申し上げますと、大河ドラマで「真田丸」

が放映されて盛り上がっているのですけれども、上田城内にある眞田神社は眞田氏を祀られているということで見学者のお参りも多いのですけれども、もともとは眞田神社ではなかったのであります。この神社は、上田城の江戸時代末期の藩主であります松平氏の藩祖と藩主を祭った神社だったのですけれども、太平洋戦争後に維持が困難になりまして、苦慮された結果、著名な城主の眞田氏の歴代城主とあせて合祀しようということになりまして、神様を増やしまして、神社の名前も眞田神社に改称したのです。そうしたところが、非常に人気が上がって、参詣者も増えたと聞いております。以上でございます。

【内田】 ありがとうございます。上田市の和根崎さん、いらっしゃいますか。今現在の眞田神社の様子や、それに関わってのまちづくりみたいなことで、少しご発言頂ければありがたいのですが。

【和根崎】 今、森山先生からご指摘頂いた点なのですが、上田城というのは、今日、研究会でお聞きした先生方のお話の中で、模擬天守以外はみんな当てはまっているお城なのです。ソメイヨシノにしても、都市公園にしても、神社にしても、です。これまでそういった近現代の施設というものに対して、市としてもあまり芳しくないものだという扱いをしてきたのですが、天守がなくて、櫓もたまたま3つ残っているのですが、眞田神社の参詣者が上田城跡公園の利用者の大半を占めている現状の中で、今まで上田城の整備を進めてきたという経過があります。特にこれからだ思うのですけれども、年末年始にかけては相当な参詣者がお城のほうに来て頂けると思います。

それから、大河ドラマが始まる前に、神社としても、何とか上田城の整備に協力をしたいということで、今日は実はうちの城跡の方もいろいろとご指導頂いている文化庁の佐藤さんも見えてるところなのですが、社務所の改修をしたいということで相談がありました。史跡とは関係のない施設を新しくするという事に対して、私共も葛藤もあったのですけれども、結果として、従前の建物よりも床面積を

小さくして、さらに、屋根の高さについても、市の教育委員会はともかく、佐藤さんとの話し合いの中で、ここはこういうふうにした方が良いのではないかという点を、全て神社の方も受け入れてくれたというか、快諾して下さったおかげもあって、新しく社務所を改築することができたのです。その結果、さらに参詣者が増え、お守りであるとか絵馬、そのようなものの売上げが非常に上がってきています。

そもそも最初は、先程の森山先生のお話の中にあった通り、最後の藩主である松平氏を祀った神社だったのです。そういった意味からは、眞田氏のイメージが強い今の城跡とはあまりゆかりのない神社のように考えられがちなのですが、ただし、近年は、神社のご利益という意味では、眞田氏が2度、徳川を打ち破った「落ちなかった」城であるということで、例えば、受験生であるとか、あるいは選挙に出られるような方がお参りに来るといふ、松平神社だった当初の信仰とはちょっと、道が外れたと言いたい言い過ぎかもしれませんが、改名して眞田氏時代の城の歴史と結び付けて神社というものを維持していこうということになったのだと思います。

実は眞田神社には、氏子さんがいないのです。森山先生のお話の通り、旧幕臣の方々がつくったもので、いまだにその血筋の方だけで苦勞をされて運営をしているところなのですけれども、社務所をつくった際の借金がほぼ今年で返せるのではないかと笑い話になるくらい、今年は相当な数のお客様がみえているというのが現状でございます。

【内田】 ありがとうございます。来場者はここ1年間でおよそ何万人ですか。

【和根崎】 神社そのものの人数はわからないのですけれども、お城の中にある旧市民会館を解体して付近を武者溜りとして整備する計画ですが、建物を撤去する前に活用しようということで、大河ドラマ館としました。営業は来月の15日までの施設ということなのですが、一昨日の時点で1月からの入館者が95万人を超えたと。その影響もあって、城跡公園内

にある博物館も、初めて入館者数が50万人を超えました。来年以降の落ち込みというのが非常に怖いのですけれども、今年の状況という、そんなところになります。

【内田】 ありがとうございます。そうしましたら、今度は野中先生のお話に関することで何かご質問等ございませんでしょうか。では、丸山先生どうぞ。

【丸山】 ありがとうございます。野中先生にお尋ねしたいのは、城址が公園化される中に幾つかの類型があるというお話で、おっしゃったようなところはそうかなと思うのですが、私自身は、城址が公園化されるけれども、そのきっかけもいろいろあると。問題は、公園化されて、先程内田さんからお話があったように、近世の城郭に重層的に色々なものが建ちますよね、建築もあれば庭園もあると。そういうものが、今、この吉田初三郎（大正から昭和の鳥瞰図絵師）などを見せてもらおうと、非常に観光的な要素も加わっておって、皆さん、来られている文化財の方で一番苦勞されているのは、オーセンティシティーをどこに求めるかと、整備の判断ですね。私自身も名古屋城の二の丸庭園を整備していて、あそこも、先程羽賀先生おっしゃったように、第3師団の建物が、発掘したら出てくるのです。それはそれなりに意義があるのですが、それと、もう1つは、近世に2段階あって、江戸初期のものにするのか、江戸後期といいますか文化文政期、そういうお城における重層的な中にある文化財的な価値が、近世なら高く近代なら低いという訳ではなくて、そうい

うところを、ずっとお城を整備されているということで、どのあたりをターゲットにされているのか、考え方でも結構です、事例でも結構ですので、もしありましたらお願いしたいと思います。

【野中】 難しくて、どういう切り口で話を差し上げればいいのか、にわかには頭の整理ができませんが、私自身はどうしても江戸に回帰することに対して懐疑的な立場がいつもあります。要するに、これから先どういう、例えば子や孫レベルじゃなくて百年後、二百年後に何を残すのかという観点から見ていく方が良いのかなというようにいつも思っています。戻るのではなくて、この先どうするのか。その時に考えるのが、もちろん江戸から始まるのであれば近世もそうですが、近代や現代、戦後も含めて行われてきた履歴、空間的な履歴も含めて、それをちゃんと検証した上で、それをどう次につなげていくのかと。城があるということは歴史都市ですから、歴史都市の厚みがそこに表れるのではないかなというふうに思うのです。江戸期は二百何十年かあって、それ以降でも今までに百何十年かあるのですけれども、その四百年以上の厚みを、例えば城址に求めて整備をしていく。50年経てば登録文化財になることって、全てではないのですが、あると思います。ですから、百年後に文化財になるようなものをつくっていくことだって、考え方としてはあるのかなと。五十年クラスではという感じの大阪城の例もありますから。いずれにしても、近現代の履歴というものの、やっぱりしっかり位置づけてあげることですね。

もう1つ、先ほど少しはしょってしまったのですが、堀についても同じで、堀も公園なのに埋め立てられるということもかつてはありました。それ以外にも、堀を埋め立てるとするのは色々な理由があります。衛生上の問題であるとか、宅地化の問題であるとか、道路をつくるとか、色々な経緯があります。なぜ埋め立てられたのか。それをまた元もとに復原するというのが最近行われていますが、また江戸時代のような状況に戻さなければいけない理由もしっかりちゃんと伝えられているのかなと。昔はこ



うだったからというのは、あまり理由にならないと思います。次の世代につなげていくために城跡の堀はこうあるべきだろうということで問いかけていくべきと。今、堀があったとしても、埋め立てられる計画があったものを阻止して、反対運動、特に市民運動で反対して守られている堀というのもあります。それは、たまたま残った堀とはまた意味が違ふと思うのです。空間的な整備からすれば、そう大きくは変わらないかもしれませんが、先ほど内田さんが最後のほうに言われましたストーリーという中には、そういった過去の目に見えないであろう動きや取り組みというものもしっかり入れて、堀を残す、整備するなら整備する、その裏づけを次の世代に伝えるということも大事ではないかなというふうに思っています。

【丸山】 ありがとうございます。堀については、今、松本市が松本城外堀を史跡の追加指定しながら順番に買い取っていて、僕は非常に面白いなというのと、これがきっかけになって地方でそういうことが起こるのかと思う一方、堀を復原すると石垣の積み方、いわゆる技術者とか、そういう問題が出てくるのではないかなと思って、単に復原するというのは結構難しい問題かなとは思っております。今おっしゃった、色々な内的なものをどう残したとか、私も、新しいものを作っても、それが50年後、文化財ぐらいになるレベルのものを作れというような考え方、非常に共鳴するところであります。

【野中】 先般、日本造園学会の大会で松本城の堀を戻すという情報を聞いて、今日は時間があれば追加で話をしようかなと思ってスライドは用意してありましたが、私はどちらかというと否定的です。計画的な意図はよくわかるのです、戦略的な意図も含めて。駅から来た時に、現状では天守が見えません。だけど、あそこの建物がなくなると、結構手前のほうから天守が見えるような、道路の拡幅とあわせて堀を整備することで、かなり広いオープンスペースができて眺望が良くなるとかという計画論的な意図はよくわかるのです。けれども、埋め立てられた後

に宅地化されて、1つの町内会が形成されている。町内会1つをなくしてしまうということに、その共同体といいますかコミュニティーといいますか、それを根こそぎ別に移転してしまうのかというぐらいの大胆さがあります。もちろんそれは地元で協議されて、議論されて、共有されていればいいとは思うのですけれども、何か傍目で見ると、少しやり過ぎかなというような気がしました。もちろんそういうものとは別に、石垣の積み方とかを含めて、石垣を本当にそのまま元へ戻すのはすごく大変な苦勞もあるし、技術的にクリアしなければいけないこととか、あるいは耐久性の部分も含めてですけれども。例えば、小田原城も関東大震災の震源地に近かったということもあって、かなりすごく大きな被害がありました。天守台の石垣も積み直しましたが、もともとあった高さよりもどうも低くせざるを得なかった現状があります。それはそれで、やっぱり例えば天変地異のそういった履歴の中でそういうことになったということがわかるような、見える化というか、可視化するような手続の中でのストーリーが明確化されるといいのかなというような気がします。

【丸山】 ありがとうございます。僕は自分がかかわり始めて最近思うのは、発掘との関係なのです。結局、僕はプロではないので、発掘されるプロと一緒に、復元的な整備とか、その構造であるとか、材料は、またそれは地元の造園屋さん、この石はどこからとってきたんやとか聞くのですけれども、そういう情報がやはり、こういうお城関係では他とは違うものがいっぱいあるのかなと思っております。

それで、会場におられる中で、僕は、発掘しながらどこまで復原あるいは整備したらいいかというのが苦勞されている方がいらっしゃるのではないかと、そういう苦勞話を聞かせてもらえたらいいのですけれども、おられませんか。

【内田】 下を向いて、にやっと笑っていた鳥取市の佐々木さんはどうでしょうか。

【佐々木】 鳥取市の佐々木と申します。今、鳥取市のほうでは、鳥取城跡の復原整備をやっています。

平成17年度に基本計画をつくり、復原するということで調査をやっていますが、今年ようやく文化庁さんに復原の許可を頂いて、最初の復原建造物として橋をつくるということになりまして、ようやく契約ができたという状況になっています。調査等を含めてなのですが10年間やってきました。実は鳥取城の場合は昭和40年代から、石垣の修理を50年間ずっと続けているというところであります。城跡の石垣の修理というのは本当に最初の頃から現代に至るまで、工法的なところも含めて、ずっと文化庁さんにもご指導頂きながらやってきたところなのです。そもそも石積みの修復についての考え方が、早い時期は現地で直したところがわかるように修理をしてということがありましたが、近年になって設計図上だけでなく3次元でもデータを採っているの、修復場所が後で検証できるものですから、極力旧来に近い形で修復跡がわからないように現地での修理をしているということがあります。

実際、鳥取城の場合も、近世の間に何度か改造がされているということと併せて、その後、明治20年代以降、学校利用ですとか、先程スライドで紹介頂いた仁風閣という宿舎が造られたりとか、非常に重層的な使われ方をしています。その中で、復原整備をしようとする、どの年代が果たして鳥取城として正しい姿なのかというのがやはり当初から問われてきたところです。そうは言っても、ただ、学校時代の方も、本来の考え方という城ではないので、撤去して頂くべきですけども、やはり復原費用がかかる中で、地元の方の理解を得られないだろうと思いますし、重要文化財指定を受けている仁風閣については、移転というよりその場、現地にあることに意味がある。やはり藩主、池田家自身が建てたものでありますので、そういったものと調和しながら、かつ近世城郭としての姿を復原的に形づくりというようなことで、非常に難しい状態になっています。

また、発掘調査についても、学校利用している敷地の覆土が薄い、最後の幕末期の面が、土の被りが10cmぐらいしかないような場所が出てきてしまうの

で、実際には明治の初年の廃城時の面とそれ以前に使っていた面の区別がなかなかつかないということがありまして、調査も含めて数年知見を積み重ねて、最近になってかなり確実な情報を得られるということになってきています。ただ、今復元している橋についても、発掘調査をしてみたところ、橋脚の基礎がそのまま堀に刺さっている状態で出てきまして、復元しようとして同じ座標で建てようすると、橋脚の下に元の橋脚があるということになってしましまして、結局元の橋脚を傷めないように基礎を打ち直して頂いてということをやるとなっているんです。ただ、一応、幕末期の鳥取城の姿がわかる形というのが1つフォーカスになっていて、現存する施設と折り合いをつけながら、何とかそういう形を伝えていくというふうにしております。この件については、非常に文化庁の佐藤主任調査官にお世話になっております。

【内田】 他に何か質問等ございませんでしょうか。

【羽賀】 私の方からよろしいですか。壇上から質問して、ちょっと場違いですけども、今日の野中先生のお話で、面白いというか興味深いことを聞かせて頂いてご質問させて頂きたいのですが、1つは、今日のお話で、やはり城郭の持つ、それをどう利用するかという現実的な条件ということがあると思うのです。

もう1つは、心理的な作用とか象徴性とか、そういう問題に関わって、今日は駅と城郭の関係性とか、そういう見る、見られるという関係の中で1つお話があったと思うのですけれども、その中で、スライドの最初のほうに荒廃したお城の話があって、小田原の絵はがきが紹介されたスライドがあって、それが大変おもしろかったのですけれども、つまり、絵はがきにして、それを小田原の場合、破壊状況をある種宣伝するという。これ、いつのものかお聞きしたいのですけれども、それに加えて、こういうものを絵はがきにして流通させるということの意味合いですね。これは城郭を利用するということではなくて、何らかの旧習の破壊というか、そういう側面がある

と思うのですけども、そのあたりのお城の持っている心理的な作用みたいなものを、もし何かご見解があればお聞きしたいと思うのですけども、よろしくをお願いします。

【野中】 ありがとうございます。おそらく絵はがきになったのは解体されてから数十年後だと思うのです。絵はがきの普及の状況からすると、明治中頃以降のことだと。写真が残っていたからそれを絵はがきにしたということがあると思いますが、逆に、私も検討課題がいっぱいまだあるなというのを意識したように、それほど多く分析といいますか、考えを詰めたわけではありません。

ただ、やはり絵はがきにして流通と言いますか、一般に知ってもらうという、要するに販売する側の、何かしらの民間企業の人たちの思いの中には、かつてあった小田原城主に対する懐古というか追慕みたいなものは確かにあったのかなとすると、ストーリーとしては繋がるかもしれないですね。少しお話ししたように、小田原城も天守が壊される前に一時的に一般に開放したことがありました。やはりその時にも多くの人、それは士族だけではなく多くの人たちが来て、懐かしんだのか、単に興味関心、好奇心だけで行ったのかはわかりませんが、少なくともその藩内の人たちにとってみれば、その象徴的なものがなくなることに對して、新しい近代国家、体制の中に組み入れられるということを体験することになりました。それが例えば絵はがきの方に繋がるのかどうか、にわかには私も判断はできません。ただし例えば城内に入ることができたであろう侍さんは一部の人たちだったとはいえ、まだ存命されていたはずなので、明治の半ば頃だと、そのあたりの方々の心理的な意味合いというものは、それぞれにまたあるのではないかなと。済みません、あまり明確な答えが出なくて申しわけないのですが、そんな気持ちがあります。

【森山】 よろしいですか。この絵はがきによって城郭の変遷を知るという手法なのですから、これは城郭を研究する人の中では既に行われているわけ

です。今日出席されております城館史料学会(城郭談話会)の高田徹さんが絵はがきを収集されていて、これを体系的にまとめて発表されているのですけれども、そういう意味で、絵はがきというのは、その時代その時代の城の姿を残しておりますから、これは資料としては非常に貴重だと思います。

【内田】 高木先生、どうぞ。

【高木】 私も壇上から発言します。今の野中先生の発言には、私の報告への静かな批判が含まれていました。私自身は弘前城ぐらいしか分析していませんし、主には明治20年代から1900年（明治33年）前後までの、ナショナリズムが発揚される時期の城跡の問題をお話ししました。ナショナリズムは、先程、話題にでていました地域の拠り所となる問題、それからローカルアイデンティティーの問題が非常に関わっているのではないかと考えます。

それで、明治前期の府県博覧会が行われる、例えば奈良ですと東大寺の大仏殿が会場ですし、京都ではご紹介があった本願寺の他に、京都御所において開催されます。城跡も同じですが、明治初年の文明開化の時期に各府県で博覧会が開催されたのは、大きな箱物（建造物）としての意味だと思います。しかし例えば京都御所や東大寺の大仏殿を考えてみた時に、明治初年の大きな箱物の場から、「伝統文化」や文化財としての意味づけがなされだすのは、やはり明治10年代（1877-1886）からです。1880年代に、例えばフェノロサや岡倉天心が東大寺を古代文化と位置づけるとか、岩倉具視が京都御所を保存する。日清、日露戦争を経て、ローカル・アイデンティティーがナショナリズムにつながるなかで、城跡をどう考えていくのか。この問題が歴史学、近代史の人間にとっては非常に重要になると思います。というのも、野中先生が指摘された府県の博覧会に使われていた建造物の記憶の重要性は、説得的に聞いたのですが、明治初年と1900年（明治33年）前後では時代の段階性が違います。藩祖300年の記念祭が全国でおこなわれる時期に、今日につながる城跡のストーリーがつくられる。そのストーリーのつくられ

方に、野中先生がおっしゃったように、重層的な視点を入れることが、大事だと思います。日清、日露戦争の時期には、1600年前後に時代を特化したようなローカル・アイデンティティーをつくり、奈良では古代の顕彰、京都でも平安朝の顕彰だと思います。そういう重層性のない、ある時代を切り取って特化するローカル・アイデンティティーをつくりだしてきた歴史的な経緯があります。したがって今日的にどういうストーリーをつくるかという時、歴史の重層性は、重要だと同感した次第です。

【内田】 ありがとうございます。

そうしましたら、私も最後に少し報告させて頂きましたけど、何か私の報告について質問等、ございませんでしょうか。実は質問票を頂いておりまして、発掘調査によって城内に近代建築の基礎などの遺構が残っていることが判明する場合もあり、積極的に整備に生かすべきでしょうかとか、平面表示などで整備した事例があるのでしょうかということです。また、ストーリー性を重視するのであれば、これらも含めて考えるべきだと考えているというような、そのようなことでございました。

【丸山】 先程から出ているのですが、名古屋城の二の丸では今おっしゃったようなことが出てきているのです。庭に関していえば、江戸後期のものが部分的に現存しておりますが、発掘によっても当時の絵図に描かれたものが一部出てきています。また、近代に軍が入って、第3師団がつくり直したという部分があります。二の丸庭園には両時期のものがあって、さて、これから、どう整備するのがいいのかという話になったのです。こういう現実というのはどこでも出てきています。発掘して出てきたものをベースに、近世にしたらいいかどうかという議論があります。今のところは、近代につくられたものも、先ほど高木さんおっしゃった重層性ですが、こちらも庭園の変遷という意味では整備するにあたっては残さないといけないということもあります。だから、城がつくられた当時の状態に戻すのがいいとは限らないのではないかと、やはりその経時的な歴

史というものをうまく残せないものかということがあって、苦勞しているところです。建築の遺構に関しては、第3師団の兵舎のトイレが発掘調査で出てきました。それを復元的に整備でおこなうことはちょっと難しいので、非常にケース・バイ・ケースで苦勞しているのが現状です。

こういう苦勞話がこういうところで、いろいろ議論できるネットワークというか、そういう情報が交換できればいいなと思っております。あまりこういうところでしゃべるネタがないですが、内田さんが前に座れと言われたので、そのあたりのことが今後、奈文研でやってもらえればいいなと思っております。

【内田】 ありがとうございます。多分、また来年度のこの時期に研究会をやると思いますが、今年度発表して頂いたことにつきましては、その時までに報告書の形でまとめていこうと思っております。その後半については、各地の事例について原稿依頼をしましてまとめていきたいと思っておりますので、是非こんなことで今苦勞している、考えているというようなことや、抱えている問題などを短い文章でも構いませんので、少しずつまとめられたら、それはそれで有効なんじゃないかなと思っておりますので、是非、この会の後で、少し情報を寄せて頂けたら有難いなと思っておりますのでございます。

やはり重層性ということでは、紹介させて頂きました広島城の大本営跡が実際のこの整備で参考になります。その基壇を積極的に整備はしないので、“主”は城としての機能を見せるような展示を行うつつも、“従”として見せるというような、そういう基本的な考え方で整備をしているということでしたけれども、そういった考え方は割合、普遍的に使えるのではないかなと個人的には思っているところでございます。

それから、この研究会に先立ちまして質問を頂いているのもございます。それは、やはり歴史の重層性の表現の問題でございまして、時代は違いますが、美濃の国府跡の正殿と、そこには神社の

南宮御旅神社というのが立地していたりするという
こともございます。他にも国府跡で、正殿の跡など
に神社が立地しているというようなものも幾つか
あったと思います。

また、その方から関連することで、そこは美濃焼
の産地で、古墳の石室の中には道祖神ならぬ陶祖神
というものが、焼き物の神様ということなのでしょう
か、祀られるのだと。そういったものが後の時代
のものなのですけれども、どう扱っていいものかとい
うようなこともございます。さらに、中世の山城
の八王子城跡で城跡と直接関係ない石造物があるとい
うようなことで、その取り扱いを考えてしまうとい
うようなことでございました。

いらっしゃいますか、イビソクの岡本さん。じゃ、
あと、何か補足をしてくれますか。

【岡本】 今言って頂いた通りなのですけれども、直
接史跡に関係のない神社だったり石造物だったりと
かが置いておりまして、それをどのように取り扱っ
ていくのか。例えば、古墳の中に、石室の中にある
陶祖神の石造物に関しては、そのまま古墳の石室に
置いておく方がいいのか、また、石室からはどか
させて頂いて、古墳の墳丘の外に置いて、解説板等
で説明させて頂く方がいいのか。地元の方の意見
とか、いろいろ反映させないとはいけないと思うの
ですけれども、他のところではこういったふうに
やっているよとか、こういうふうに考えているとい
うのがあれば、教えて頂きたいなというふうに思っ
ています。

【内田】 古墳の石室というのも必ずしもそこだけの
問題でもなく、また近代になって地元で信仰される
ような場合も、他にも結構あります。古墳だけでも
ないし、また古代の官衙だけでもありませんし、色々
な遺跡で後の時代のもものがそれなりに被さっている
のが現状だと思います。そういった中で、整備の時
には、その評価を、やはり文化財としてどうかとい
うようなことと、地域全体の文脈の中でそれをうまく
説明できるのか、残した時にそれが説明できるの
かどうか、その辺が決め手になるのかなと思ってお

ります。できるだけ学術的に遺跡を評価していつて
判断をするということですが、一方で、そこ
には地域住民の信仰だとかということもあると、それ
もまた、かなり同等に扱わなきゃいけないようなこ
となのかなと思いますので、全体としてこうだとい
うことはなかなか言うことができなくて、やはり個
別にその歴史的な意味合いというのを紐解いていつ
て、その意味合いが地域全体の歴史のストーリーな
どで説明できるかどうかとか、その辺で判断すべき
ことなのかなと思ってはいるところでございます。
よろしいでしょうか。

では、羽賀先生のスライドの中で、非常に情緒的
な部分も大切だというようなことで「荒城の月」を
挙げて頂いておりましたけれども、そういう情緒的
な教育だとか、そういったことも城址は非常に重要
なものだと思います。そして、城跡に学校も結構、
ご存じの通り、たくさん立地しております。私も本
丸にあった学校に通っていたのですけれども、城跡
に高校なり学校があるというのは、通う人間にとっ
ては1つのアイデンティティーであったりもするわ
けです。ただ、それは文化財にとっていいことかど
うかという、これはなかなか難しい問題もあつた
りいたします。全国の城跡を見られている中で、森
山先生、城跡、学校とか、あるいは他の施設に関し
て一言お願い致します。

【森山】 先程名古屋城の天守の復原のことについて
お話がありましたので、私なりに意見を申し上げた
いと思うのですけれども、この名古屋城の天守とい
うのは、よくご存じのように、徳川家康が天下普請
で築城したものでありまして、これを設計したのは
名工の中井正清であります。近世の城郭建築の白眉
と言っていいと思います。

また、城の保存というものが問題になったのは、
名古屋城が原点だったわけでありまして。これは、明
治初年に城が破壊されることになり、要るか要らな
いか議論をされていた時に、城の保存を最初に訴え
た人たちは、博物学者、その当時そう言っていたの
ですけれども、後に博物館をつくった人たちであり

ました。最初に声を上げたのが町田久成という旧薩摩藩士で、そのころ文部大丞だったのですけれども、明治5年に宮内少丞の世古延世という人を連れて地方巡視をしまして、名古屋城を見て、その威容に非常に感心したわけです。当時、名古屋城というのは金の鯨は宮内省に献上されて各地で展示されていたので、鯨もない天守だったのですけれども、その姿に感銘を受けました。そして、近くにある犬山城が取り壊しになるということを聞きまして、これは何とか城を文化財として保存しなければならないと考えて、頼ったのが佐賀藩出身の参議の大隈重信でありました。なぜ大隈重信かといいますと、彼の家は佐賀藩の築城家の家柄なので城郭に非常に関心があったわけです。その結果、町田の手紙が届いた直後に太政官から陸軍省に、地方城郭取り壊しの儀は伺いを経た上で処置すべしという指示が発せられて、城郭の取り壊し等はそれまでは陸軍省とか府県の判断でやっていたものが、太政官の承認があることになったわけであります。

さらに、この大隈重信が城の保存に尽力したということでもありますけれども、明治12年に大隈重信が明治天皇に随行して北陸、東海を回りました。その時に、たまたま滋賀県に来た時に、管内を視察しましたところ、ちょうど彦根城が、この城は存城だったのですけれども、陸軍省も要らないということで、取り壊しを始めていたのです。大隈はそれを見て、非常に惜しいということで、明治天皇にお願いをしまして、お手元金から保存費用が出まして、彦根城は保存されることになりました。さらに、陸軍省がこれに非常に力を得まして、陸軍省も、代表的な名城として名古屋城と姫路城を保存したいと思っていたのですけれども、経費が捻出できないので苦慮していたのですけれども、彦根城が保存されるなら、もっと価値のある名古屋城や姫路城も保存できるだろうということで、太政官に上申して、永久保存の指示が出たのであります。ただ、この保存の指示というのは一時金が出た程度でありまして、実際はあまり有効ではなかったのですけれども、当面の取り

壊しは免れ、その後修理等も次第に行われたのであります。

このように名古屋城は近世の城郭建築の代表で、御殿とともに、城郭建築の白眉であると思います。ですから、明治以来、名古屋城を保存しようとして先人が努力をしてきたのですけれども、太平洋戦争で失われました。私が思うに、日本の建築文化財で太平洋戦争により失われた最大の損害だと思っております。今、名古屋市がご尽力されて御殿の復原が進んでいるのですけれども、御殿を復原するならば、あわせて天守もぜひ木造で復原してほしいと思います。

【内田】 高木先生、どうぞ。

【高木】 今のお話、すごく興味深かったのですけれども、1879年（明治12年）に城を保存すると言った大隈が、その足で、京都に来た時には延暦寺を保存しろ、それから、古社寺を保存すべきと建議するわけです。ですので、やはり文化財保存行政全体が動き出す、そういう明治10年代の動きのなかで、古社寺保存も城跡保存も連動していると思うわけです。

【内田】 どうもありがとうございます。最後の時間も迫ってまいりましたので壇上の方から何か言っておきたいこと、よろしいでしょうか。

そうしましたら、最後に一言、文化庁の佐藤さんの方に。今後、遺跡の整備についてどうするかというのがそれぞれの場所で非常に頭を抱えるような問題だと思いますけれども、関係することで一言お願いいたします。

【佐藤】 先生方のお話を聞いて非常に勉強になりました。ありがとうございました。

史跡は土地の指定でありますので、その土地の履歴を明らかにすることであるとか、あるいはその価値の重層性に着目すべきだということは日頃から考えてまいりました。高木先生のご報告の中にあった黑板勝美が文化財保護の大枠を決めるわけですが、彼は古社寺保存法を批判しつつ、古代の寺院は守られているけれども、近世の建物はほとんど守られていないと述べます。史跡は現代よりも古いも

のは全て対象にするのだということです。つまり、史跡というものは古いものが大事だということとは決別した世界であったわけです。そして、黒板勝美は50年ということを言いました。明治の終わりごろから史跡の保護を論じ、法律ができるのは大正8年のことです。50年前というのは明治維新となりますので、大体、江戸時代までは守りましょうということで、箱根の旧街道とか、次々と指定していくわけです。我々にとって、50年というのは当然、近代を射程に入らなければならないことになります。行政的にいうと、平成7年に指定基準の見直しというのをやっています。そこでは、例えば古戦場という指定の基準がありますけれども、古戦場では、関ヶ原の古戦場は守れても近代の戦跡は守れないので、戦跡という言葉を使って書き上げとか、例示をすることにしました。あるいは、治山治水でいえば、これまで堤防は入っていましたが、これからはダムも対象になるのだということをやりました。基準の見直しをすることによって、原爆ドームの指定などをやってきたという経緯があります。当然、土地の履歴ということを考える上では近代、そして、現代というのはどこからかということもありますが、そういったことを視野に入れるのは当然のことだと考えられるわけです。

ただそうした場合に、では整備はどうするかということが出てきます。これは変数がX、Y、Zと出てくるわけですから、難しい問題です。松本城の話題もありましたけれども、私は西の外堀、それから南の西外堀を掘り起こして、あれも話すと長くなりますけれども、そういう事業はすばらしいことではないかなというように思っています。学術的な検討と、それから、市民の同意をどのように獲得してやっていくか、それには税金を投入してやっていくわけですので、土地の履歴というものを検証とか研究していくことの上に立って、じゃ、どういう整備をしていくのかという新しい課題を私たちは抱えることになっているということになります。その辺りことは、これからこの研究会でやっていくことにな

ると思いますが、皆さんが抱えている問題は、土地の履歴、価値の重層性ということを踏まえて考えていかなきゃいけないということではないかと、そのように思います。

私に関わってきた遺跡については、やはり近代にどうだったのかということを考えてまいりました。城跡では典型的に近世と近代の問題が出てきますが、実はあらゆる遺跡にとって共通するものではないか、縄文時代の遺跡についても、そこが近世にどういう状態だったのか、近代にどういう状態だったのかというようなことは、やはり問題なのではないかなというふうに考えているところでございます。

【内田】 どうもありがとうございました。以上で総合討議は終わりにさせて頂きたいと思います。アンケート用紙どうぞ記入をして頂き、気をつけてお帰りになって頂ければと思います。どうもお忙しい中、また寒い中、奈文研の方に来て頂きまして、ありがとうございました。(拍手)

文責：内田和伸